

島にやってくるという設定だが、さてその捜査の進展は？マーティン・スコセッシとレオナルド・ディカプリオのコンビ作の過去3作はどれもテーマ設定がはっきりしていたが、デニス・ルヘイン原作の本作は謎が謎を呼ぶミステリー。失踪した女性患者の部屋に残されていたのは「4の法則」だが、さてその意味は？

テディの体調が何となく気になるが・・・

本作のプレスシートには「Who is 67?」と手書きされたメモが4枚の写真とともに入っている。4枚の写真に写っているのは、主役のテディと相棒のチャック。そして病院長のジョン・コーリー（ベン・キングズレー）と火事で焼け死んだとされているテディの愛妻ドロレス・シャナル（ミシェル・ウィリアムズ）だ。シャッター アイランド内の精神病院には、男性患者用のA棟と女性患者用のB棟そして特別な患者用のC棟があるが、その収容人数は計66人。したがって、そもそも「Who is 67?」という質問自体がナンセンスだが、さて？

映画はテディとチャックが小舟に乗ってシャッター アイランドに乗り込むシーンから始まるが、そこで気になるのがディカプリオ演ずるテディの体調。水あたりしたわけではないだろうがなぜか水に脅えているようだし、チャックの目にはテディの顔は真っ青らしい。映画中盤でテディの愛妻ドロレスが子供とともに火事で死亡したことが明らかにされるので、火事を消すための水が1つのポイントになるらしい。また、この火事は失火ではなく放火魔の男アンドルー・レディス（イライアス・コティーズ）がつけたマッチによるものらしいから、テディがC病棟をかき回る中でつけるマッチも1つのポイントに。

精悍な顔つきで自信満々の連邦保安官の姿を予想していたのに、島に乗り込む前から体調がこれでは心配。しかも、こんな困難な仕事には長年連れ添った相棒が適任だが、今回のチャックは初の相棒。チャックは先輩のテディを立てて「ボス」と呼んでいるように、万事控えめだが、そんな2人の相性は？

ポイント その1 この質問はナニ？

本作は2時間18分の大作だが、ハイライトの大スペクタクルシーンがあるわけではなく、前半は淡々と病院内におけるテディとチャックの「捜査」が進んでいだけだから、ある意味緊張感の持続がしんどいかもかもしれない。そんな中ストーリー展開のポイントがいくつかあるのでそれを指摘しておきたい。

その第1は、テディとチャックが病院内の患者たち（＝犯罪者たち）からレイチェル失踪について事情聴取する際、テディがいつも「アンドルー・レディスという名の患者を知らないか？」という本筋とは全く関係のない質問を投げかけること。相棒のチャックはすぐにこれに気付き、「レディスって誰だ？」と尋ねたのは当然。それに対するテディの答えは、妻子を放火で死亡させた憎き犯人がレディスであり、レディスがここシャッター アイ

アイランド内の病院（＝刑務所）に収容されているためその復讐を果たすべくここにやってきたという驚くべきものだった。しかし、これって連邦保安官の完全な公私混同では？しかも、ここでテディが狙っているレディスへの復讐とは一体どんなこと？

ポイント その2 相棒は信用できるの？

本作の主演は当然レオナルド・ディカプリオ。しかし、映画冒頭からテディの体調の悪化が気になっていたとおり、病院内の捜査＝事情聴取に取り組んでからもますます身体の調子が悪くなり、寝込んだり震えがきたりと決してカッコいい役とはいえない。そんなテディも同僚のチャックを信頼しているいろいろな話をしていたようだが、私にはどうもチャックの出身地が気にかかる。しかも、こんな重要な任務の相棒がはじめてというのも不自然だ。

そんな疑問が急激に拡大するのは、テディが忍び込んだ病棟の中である患者（犯罪者）と出会い、話をした時から。テディは連邦保安官としてシャッター アイランドにレイチェル失踪の捜査のために来たわけだが、その男からテディはある筋書きどおりにシャッター アイランド内に導き入れられたもので、2度と島から出られないと言われたからビックリ。即座に「何をバカな！」と否定したものの、相棒のことをよく知らないことを指摘されると啞然。

ひょっとして、チャックも自分につけられた監視役？そんな疑惑が広がり始めると、テディの頭の中はパニック状態に。ちなみに、良好な関係の夫婦だって、誰かからある日それなりの説得力をもって妻の浮気疑惑を指摘されると不安になるのは当然。そして一度疑惑をもってしまうと、いろいろ思い当たるフシが・・・？

ポイント その3 エセルとの会話は？

シャッター アイランドが脱出不可能とされているのは、玄関口の棧橋に着く船でしか脱出できないため。つまり裏側は断崖絶壁になっているから、ここからの脱出は不可能というわけだ。そこに灯台があるのも1つのポイント。またその灯台の中では何が行われているかも1つのポイントだが、映画後半の大きなポイントは、灯台をさぐるためにやってきたテディが断崖の中にあつた洞窟で、真実を知る謎の女性エセル・パートン（パトリシア・クラークソン）と出会うこと。

この女性がレイチェル？誰もがそう思うはずだが、それは不正解。この真実を知る謎の女性は女医さんなのだが、なぜか患者として病院内に収容されたため逃げてきたらしい。洞窟内でのこの女性とテディとの会話は衝撃的だ。難しい内容を含んでいるので注意深く聞く必要があるが、なるほど、すごい能力を持っている人間の脳をあれこれ細工すれば、人間改造なんていとも簡単に？

ラスト30分に注目！

テディの相棒チャックも冒頭から何となく気になるが、本作最大のキーマンは病院長のジョン・コーリー。近時のレオナルド・ディカプリオも、『タイタニック』（97年）はもちろん『仮面の男』（98年）や『ザ・ビーチ』（00年）、『キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン』（02年）などの初々しさから完全に脱却し、大人の男の臭いをブンブンさせているうえ、演技派に成長した。しかし、キーマンであるジョン・コーリーを演ずるのは『ガンジー』（82年）や『砂と霧の家』（03年）などで有名な演技派のベテランであるベン・キングズレー。演技派の演技派たる最大の由縁は、善玉か悪玉かが明らかにならないことだが、その典型がこのコーリー院長。病院内のスタッフはコーリー院長を含めて全員が謎を秘めた怪しげな動きをしているが、不審な行動をとるテディを見逃しているようでいながらすべてを見越したようなコーリー院長の態度が大いに気になる。さてそんなコーリー院長の実態は？ 他方、チャックへの不信を募らせたテディは途中からチャックと別れ単独行動となるが、チャックが崖から落ちてしまったから大変。さてチャックの生死は？

本作のクライマックスは、ラスト30分の灯台最上階の部屋でのテディとコーリー院長との対決。といっても、それは『ディパーテッド』における衝撃のラスト20分のような銃の撃ち合いではなく、言葉と言葉の対決。さて、どちらの言葉に説得力が？ また、そんな2人の「対決」に途中から加わってくるのがチャックだが、なぜチャックがそこに？ この衝撃のラスト30分には、目がくぎ付けとなることまちがいない。

それにしてもレオナルド・ディカプリオはホントに男くさい演技派俳優に成長したものだ。そんなことを実感させるに十分なレオナルド・ディカプリオの演技と、マーティン・スコセッシ監督の演出に拍手！

「超日本語吹替版」とは？

記録的な大ヒットを続けている『アバター』（09年）は3D上映に集中させるべく、日本語吹替版が約4割になっているそうだが、そもそもあなたは字幕派？ それとも日本語吹替派？ 私は断然字幕派。それは、吹替版では現実の俳優の言葉を生で聞くことができないから興味が半減してしまうためだ。ところが最近、子供向け映画だけでなく、一般の大人向けの洋画でも日本語吹替版が増えてきているらしい。そんな中で目についたのが、2010年3月9日付日本経済新聞夕刊の「若者狙い洋画『超訳』 吹き替えて巻き返す」との記事だ。

それによると、なんと大人向けミステリーの本作が「超日本語吹替版」で上映されるらしい。つまり、「配給元のパラマウントピクチャーズジャパンは上映プリント450本のうち4割強にあたる200本を吹き替えて出す。」とのことだ。上記記事は、「劇場で洋画を見る際、どちらを選ぶかを尋ねると、20～50代は7割以上が字幕と答えたのに対し、

15歳以上20歳未満の若者は約半数が吹替だった。字幕が苦手な理由に『早くて読み切れない』を挙げたのも、50代以上と並んで10代が多い。」とのこと。また『映像に集中できる』『母国語がよい』と吹き替え肯定派が圧倒的に多いのも10代だった。」とのことだ。つまり、「活字が苦手。知らない国の文化には興味がない。わかりやすさを好む。近年の若い観客が邦画に集中し、洋画があたらぬ『洋画不振』の背景がくっきりと浮かび上がった。」というわけだが、私に言わせればこれは由々しき大問題だ。

ちなみに、本作におけるシャッター アイランドの黒幕を「非米活動調査委員会だ」とチャックが明かし、「赤狩りの？」とテディが返すシーンは、物語が設定された1950年代米国の空気を伝えるやりとりだが、赤狩りの歴史を知らない人にはわからない。そこで、吹替版では「反共産主義の調査委員会だ」「政府の？」と変えたそうだが、そりゃナンセンス。観客の低いレベルに作品を合わせるのではなく、作品を理解できるレベルまで観客を引き上げなければダメなのでは・・・。

2010(平成22)年3月10日記

「風化」食い止めのため、こんな検定を！

1)『シネマルーム24』では「風化させてはならないものが！」として『カティンの森』『誰がため』『アイガー北壁』という名作を並べたが、日本でも記憶の風化を食い止めなければならないものがある。世界唯一の被爆国としての悲しい体験もそうだが、「ええ、日本ってアメリカと戦争したの？ウソー」という若者が増えている(?)昨今、「あの戦争」の記憶を風化させてはならないはずだ。

2)そんな中、5月30日付産経新聞は「戦没者への慰霊の思いを再認識しよう」と、海外の旧戦地で戦没者の慰霊活動などを行っている大学生主体のNPO団体が、今年秋に東京都内で初の「戦史検定」を企画、6月1日から受検者を募集する」と報じた。「近代戦史について初級～上級の3ランクを設定。受検料の一部は、旧戦地で傷みが激しい慰霊碑の

再整備事業などに充てる」らしい。これは「戦後65年、記憶の風化を若者主体で食い止めようという試み」で、学生たちば受検自体が戦没者の慰霊につながる。多くの方に参加してもらえたら」と話しているというからすばらしい。

3)「検定」ばやりの中、私は06年7月に4級、07年1月に3級の映画検定に合格したが、その受検勉強は大いに役立った。映画を学び知ることは楽しむことだが、戦史を学び知ることは戦没者への思いを新たにすること。ちなみに、あなたは柳条湖事件やノモンハン事件そして真珠湾攻撃やガダルカナル島の玉砕を知ってる？こんなすばらしい企画を立ち上げた学生たちに拍手！多くの人が受検し、多数の合格者を出してもらいたいものだ。

2010(平成22)年6月2日記